

## 序

日頃からりんくう総合医療センターの運営に対しましては甚大なご支援を賜り、有難うございます。心から感謝申し上げます。平成29年度の病院年報が出来上がりましたので、お届けします。

平成29年は、市立泉佐野病院が現在地のりんくうタウンに新築移転し、病院名を「りんくう総合医療センター」としてから、ちょうど20年目となる節目の年でした。この新築移転に伴い、循環器科、心臓血管外科、脳神経外科、神経内科、整形外科、形成外科、歯科口腔外科などの診療科を新設すると共に、感染症センター10床を新設して病床数は358床となり、「りんくう総合医療センター市立泉佐野病院」と名称を変更して再出発しています。本邦では極めて少ない24時間運用可能な国際空港の対岸に位置することから、災害拠点病院(平成9年)、特定感染症指定医療機関(平成12年)、国際外来開設(同18年)、外国人患者受入れ医療機関認証(同25年)等々、立地環境に合わせた特殊機能を整えると共に、隣の市立貝塚病院と共同で泉州広域母子医療センターを開設(同20年)、大阪府がん拠点病院(同21年)、地域医療支援病院(同23年)など、市民病院として、そして地域の基幹病院としての機能強化を進めてきました。

さらに、平成25年には隣接する大阪府立泉州救命救急センター(30床)と統合し、病床数388床の南泉州地域における唯一の急性期基幹病院としての体制を整えることができました。この統合は、病院の各診療科と救命、両者による医療の協働が予想以上に進み、この地域の救急医療の促進のみならず、救急医療の質の向上をもたらしたと感じています。

一方、府の南端部に位置する立地条件の影響もあり、医師確保に関しては、特定の診療科については時に難渋することがあるものの、新たに総合内科・感染症内科が新設され(同25年)、手薄であった診療科についても、糖尿病・内分泌代謝内科医と放射線科医は確保され、消化器内科医も何とか確保されつつあります。

この年度は、前年度に立ち上げた財政再建プラン(稼働率アップ、ハイケアユニット造設、未収金徴収対策、外国人患者受入れ、経費節減、等々)に通年で取り組んだ年度でもありました。前年度の秋から開始した病院の2次救急外来に3次救急を担当する救命救急医が常時支援する体制に加え、入院病棟はフリーアクセスにして時間外入院患者を受入れる看護局の繊細な病床管理など、現場職員が一丸となった絶妙の病床入退院管理を突き詰めた結果、救急患者については可及的に断ることなく、また、年間を通じて90数%の病床稼働率を維持し、収益改善に大きく寄与することができ、とても印象深い年度になりました。現場職員の疲弊が心配されましたが、大きな問題はなかったものの、一方で、医師の時間外勤務が増えたことは後に大きな課題になった1年でした。また、この病院では、何かの時の職員の瞬発力・団結力は“半端なく”、全ての現場職員には感謝々々の年度でした。

様々な施策と急速な医療改革が進められている中、南泉州地域における地域包括ケアシステムの構築に向けて、皆様方との密な連携をさらに深め、より良い医療環境を整えるべく、病院職員が一丸となって邁進する所存です。

この地域で日頃からお世話になっております皆様方、また、常に何かとご支援を頂戴している大学、諸機関の方々、今後とも引き続き、当センターに対する益々のご指導とご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

理事長 八木原 俊克

## 序

平成29年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから7年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、5年目の年でした。当センターは大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、特定感染症指定医療機関であるなど、極めて特徴的な医療機能を有した高度急性期病院です。病床数は救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有しております。母子医療に関しては、市立貝塚病院との泉州広域母子医療センターの共同運営を行い、産科医療・新生児医療(NICU)という極めて重要な役割を果たしており、TVドラマ「コウノドリ」のモデルとなった医師も在籍しております。また、関西国際空港の対岸という土地柄、当院には国際診療科があり、国際診療の分野でも全国的にも有名な施設です。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、海外からの当センターへの受診も増えており、大阪在住外国人の診療も増加しています。平成28年度末にはインバウンドの国際診療がさらに充実できるように、国際診療科の新装移転も行いました。

更に、重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備えて、我が国に4病院しかない特定感染症指定医療機関として、当センターには関西の砦という重要な役割も任されています。大変喜ばしいことに、平成30年4月よりDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群(大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院)に指定され、大阪府下でも極めて限られた大病院の仲間入りをしました。

一方、当センターでは泉州南部における病病連携・病診連携をより迅速にする診療情報連携システム「なすびんネット」を導入し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉佐野・泉南医師会の先生方との病診連携をさらに活性化させるため、平成29年4月よりりんくうメデイカルネットワークを立ち上げ、地域の先生方との積極的な交流・情報交換を行っています。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)』では、臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践してきました。この斬新な試みもあって、初期研修医の人気も急上昇し、研修枠も増えました。若い研修医には国内のみならず国際学会でも発表し、英文論文も発表できるように研修指導体制を整えています。また、業績欄にも記載されていますように、多くの国内外の学会発表や英文・和文論文も発表され、その量及び質は他病院にも誇れるのではないかと自負しています。

当センターでは消化器内科、糖尿病・内分泌代謝内科、放射線科、眼科等の一部診療科医師が不足していましたが、消化器内科医2名、放射線科医も2名体制となり、糖尿病・内分泌代謝内科も人材が充実してきました。当センターでは最近2年間赤字経営となっていましたが、職員一丸となって収益の改善に取り組んでおり、稼働率も95%近くとなっています。皆様ご存知のとおり、都道府県が主体となって「地域医療ビジョン」が策定され、これまで以上に地域完結型医療の実践が求められています。当地域は従来から非常に病診連携・病病連携が緊密に行われてきた地域であります。しかしながら、南泉州地域では健診受診率が低く、そのために癌や循環器疾患による死亡率が高いことが知られていますが、予防医学を推進し、市民の健診受診率を向上させるための新たな方策を練っていく予定です。大阪南部の中核となって良質な医療を提供できるように、当センターの医療連携や病院運営に関して、是非とも皆様方の忌憚のないご意見を賜りたく存じます。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

病院長 山下 静也